

2019年度第2回なにわECOスクエア（生物多様性の保全に向けたネットワーク会議）
議事要旨

日 時 : 2019年12月18日（水）15時～
会 場 : 環境活動推進施設（愛称「なにわECOスクエア」）1階
参加者 : 19名

● 概要

「環境プラスチック問題と生物多様性」をテーマとした講演（講師：大阪市立環境科学研究センター 研究員 中尾 賢志氏）のあと、「みんなで考えよう！環境プラスチック問題と生物多様性」と題し、ワークショップ（ファシリテーター：大阪市立環境科学研究センター 研究員 榊元 慶子氏）を実施した。

1. 講演

講師より、プラスチックごみ問題（海洋流出問題、製造過多問題、廃プラスチック問題、ポイ捨て（不法投棄）問題）、マイクロプラスチック（5mm以下の微細なプラスチック）問題、生物影響等について講演いただいた。

（講演後質疑応答より）

- 一次マイクロプラスチックについて
 - ・ 生産されたときから5mm以下のプラスチックのことを言い、下水処理において、99%が取り除かれる。
- 大気中のマイクロプラスチックについて
 - ・ まだ研究途上であるが、大気から検出しているため、どのサイズのマイクロプラスチックが肺に入っているのかを研究課題として文部科学省に申請中である。
 - ・ マイクロプラスチックを肺から検出したと新聞において報道されているが、3年前にフランスで見つかっている。
- 動物の体内に残留するプラスチックについて
 - ・ 動物がプラスチックを食べた場合、排泄されず胃内に残留する理由については、現在研究段階であるが、海鳥であれば肛門のサイズが関係していると言われている。

2. ワークショップ

参加者を4班に分け、テーマ1及び2について検討し、各班の発表を行った。

テーマ1「環境プラスチック問題を解決するには？」

- 海洋流出問題について（1班）

(意見)

- ・ 対策として、法規制やごみの回収、ごみを出さない等の取組みを SNS 等で訴えていく。
- ・ 海はつながっているので、国際的な合意形成が大切である。
- ・ 子どものころからの教育から考えていく必要がある。

(講評)

- ・ 今の若い子どもはメディアでプラスチック問題を訴えていたりするため、そのような発信により自然と環境意識が醸成されていくのではないかと期待している。

➤ ポイ捨てについて (2 班、3 班)

(意見)

- ・ ごみになるようなものを買わないことが重要である。
- ・ ポイ捨てを防ぐアイデアとしては、リサイクルしたらポイントが付く制度等の導入やプラスチックの代替製品の購入等が考えられる。
- ・ 小さい子どもに対して自然体験等を通じた教育をしていくことが重要である。
- ・ 製品が使い捨てられた方が企業は儲かるため、デポジット制を含めた回収システム等の経済システムを考えるべき。

(講評)

- ・ 近年 3R (発生抑制、再使用、再生利用) に Refuse (レジ袋を断る等) を加えた 4R の取組みがなされている。
- ・ プラスチックの製造者責任という意見が出たが、日本において EGS 投資(注)の考え方を浸透させることも大切な視点である。

(注) EGS 投資とは

環境 (Environment) ・ 社会 (Social) ・ 企業統治 (Governance) といった要素を含めて投資先の中長期的な企業価値を考慮する投資。

➤ 製造過多問題について (4 班)

(意見)

- ・ 過剰包装の商品を買わない、使用後も有効に再利用される商品を選ぶ等の取組みを市民レベルの話にしていかなければならない。

(講評)

- ・ 再利用には非常にお金がかかるため、難しい面もあるが、30%、40%の市民がプラスチックごみ問題について考えるようになると解決に向かうのではないかと考える。

テーマ2「環境プラスチック問題を大阪市生物多様性戦略にどのように取り入れていくか」

大阪市域の生き物調査の際に護岸や土嚢にプラスチックが使用されていることを確認していることや、鶴見緑地内自然体験観察園の湿地化作業においてはプラスチック製の防水シートを使用していないこと等の説明のあと、参加者が環境プラスチック問題に関して取り組んでいること、今後取り組んでいけることについて各班で検討を行った。

(意見)

- ・ 生活の中でプラスチックをゼロにすることはできないため、リユース、リサイクル等の形で改善していく方向を見出すことが重要。それ以上にモラルやマナーの教育が重要。
- ・ 大阪市の特色を考えると、日常生活の中で生物多様性保全に貢献している認証マークの付いた製品を選ぶ等の取組みが重要である。
- ・ マイクロプラスチックという研究テーマが発展途上の分野であるため、積極的に取組み等について周知していくべき。
- ・ 生物へのマイクロプラスチックの影響については分かっていない部分が多く、対策が取りづらいため、基礎研究を進める必要がある。
- ・ 生き物の死体について、そのまま処分してしまうのではなく、どの程度マイクロプラスチックが含まれているかモニタリングし、実態調査をすることもできるのではないか。
- ・ 研究や自然観察会で使う機材の材質や方法について見直して、プラスチックを環境中に離散させない工夫を考えるべきである。
- ・ 環境中にすでに散らばっているマイクロプラスチックを回収するための技術開発を含めた検討が必要であると考えており、技術ができればそれを普及させる取組みについて戦略の中で言及していくことができると考える。
- ・ 自然観察会などでごみを拾うだけでなく、どこにどのようなごみが落ちているのか調べたり、拾ったごみが最終的にどのようなルートで処理されるのかを周知していくことも取組みのひとつとして考えられる。

(講評)

- ・ すでに意識を持っており、行動に移しておられる方もいらっしゃるが、それぞれ違う方法で取り組んでおられる。
- ・ 様々な意見が出たが、施策として反映させられるのが難しいところである。